おかげさま

編集・発行
おかげさまの会
足利市本城3－2055
樹覺寺あけし会館

かの如来(にょらい)の
本願力(ほんがんりき)を観(かん)ずるに
凡愚(ぼんぐ)遇(もうお)うて
空(むな)しく過(す)ぐるものなし

入出二門偈(にゅうしゅつにもんげ)

親鸞聖人がお造りになった『入出二門偈頌』という偈頌(うた)の一節で、もともと

かの如来の本願力を観ずるに、凡愚、遇うて空しく過ぐるものなし。
一心専念すれば、すみやかに真実功徳の大宝海を満足せしむ。

と続いていくご文の前半のお言葉です。

浄土真宗の教えを理解する上で次のようなことを明らかにしようとされたのだと思われます。一つには、阿弥陀仏の救済を受けるのは「煩悩具足の凡夫」である私たちだということ。二つには、宝の海のようなすばらしい功徳を満足させていただくのは、浄土に往生してからではなく、「一心にもっぱら阿弥陀仏の名を称えるとき」、すなわち今この土においてであるということ。三つには、その時に得る利益は、私たち凡夫の自力の善根によって得る「不実の功徳」ではなく、阿弥陀仏の智

慧と慈悲が満足された「真実の功徳」であるということです。もちろんこれは、現生においてさとりを開くということではありません。称える名号そのものに、阿弥陀仏の智慧と慈悲の徳がこめられていて、私たち衆生がその名号をはからいをまじえずに受け入れ、口に称えるところに、、仏になるべき因がまどかに満たされるということを明らかにされているのです。

「本願力を観ずる」ということは「阿弥陀さまに遇う」ことであり、今すでに阿弥陀さまに出遇っているから、けっして人生を空しく過ごすことはない、とおっしゃっているのです。

《あけしの郷　明石山樹覚寺》参加をお待ちしています

三月	一日	晨朝会
三月	一日	東京教区仏婦連盟研修会
三月	八日	仏婦
三月	十八日	法話会
三月二十一日		春季彼岸会法要
四月	一日	晨朝会
四月	八日	仏婦
四月	十八日	法話会
五月	一日	晨朝会
五月	八日	親鸞聖人降誕会法要
		法話　山崎龍明先生
六月	一日	晨朝会
六月	八日	仏婦
六月十一～十三日		栃木南組念仏奉仕団
六月 十八日		法話会

真実の歩みは安心の歩み　念仏とともに

あけし酔話

今を生きる私のため

先日、ある都市部のお寺のご住職からこんな話を聞いた。

ある日、突然、中年のご婦人がお寺を訪ねてこられたので、用件を聞いてみると「主人の七回忌法要を勤めてもらえませんか」ということでした。「もし、近くにお手次のお寺がないのなら、こちらでお勤めさせていただきますので、法名を教えて頂けますか」と返事すると、一瞬とまどうような顔をされました。

そこで「葬儀の時に付けてもらった名前があるでしょう」と、あらためてご住職が言われると、ご婦人は「主人の遺言にしたがって、お葬式はせず、遺骨は海に散骨しました」と答えられたのです。

「それなら、七回忌をお勤めされる必要はないのではありませんか」と、ご住職が言われると、申し訳なさそうに、「葬儀を終えて三年目くらいまでは、主人の遺言にしたがったのだからこれでよかったと思っていましたが、四年経ち、五年経ちしているうちに、残された私の方がどうしても落ち着かなくなってきたのです」と涙ながらに心情を告白されたというのです。

最近では、葬式もせず、霊柩車だけ頼んで火葬場で荼毘に付し、遺骨を拾うだけという人も増えてきている、という新聞の特集記事もありました。しかし、はからずもこの女性が告白されているように、葬儀は残されるものにとっても大切な意味をもっているのです。

浄土真宗の葬儀は、一般に言われているように「告別式」ではありません。生前に阿弥陀さまのお育てを受けた者が、この世の命を終えると同時に浄土に生まれ、仏になった身として、残された人たちに大切なご法縁を結んでいく宗教的儀式なのです。お棺に七条袈裟を掛けるのは、故人をお導師に見立てているからだと聞いたことがあります。

たとえこの世の命を終え、今生においてひとたびの別れをしようとも、それは永遠の別れではありません。やがて悟りの世界で再び会うことができるのです。また、浄土に生まれれば、迷いの世界に還り来たって、今度は迷える人々を救うはたらきをさせていただくことができるのです。浄土はただ死後にのみ意味のある世界ではなく、そのはたらきは今すでに「南無阿弥陀仏」という喚び声となって、今を生きる私たちの身に躍動していることを、聞き開かせていただきたいと思います。

『親によばれて　藤澤信照』より

あけし あれこれ

枝垂桜（しだれざくら）と紅葉（もみじ）

春到来、雨が少ないためか花の咲きだすのが遅いので、もうすぐ咲くかなと待ち遠しい。新年度から元号が代わるのとともに、寺も境内が変わって行くことになりました。これまで境内のシンボルのように、水屋のところで可愛い小さな花を咲かせて春彼岸にほんのりと彩りを添えてくれていた枝垂桜と、春の芽吹きの美しさ、新緑のかがやき、秋の紅葉と一年を通して楽しませてくれた大きな楓、等々お堂を建てるために切ってさよならしました。桜もかなりの年数を重ねていました。楓はもっと古く、ここに寺が建つ前からあったようで、２００年程前から樹っていたようです。どちらも大きな立派な樹でした。寂しかったです。でも新しく建つお堂をたのしみに、そして桜と楓にまたいつか再開できるといいなぁと心の隅で念じながら。

シダレザクラは**バラ科サクラ属**の植物の一種で、エドヒガンの枝垂れ品種。枝が細く長くしだれている。ソメイヨシノより早く彼岸過ぎから開花する。エドヒガンの性質を受けついで長命なので各地に巨木が多い。

カエデ　ムクロジ科（旧カエデ科）カエデ属の木の総称

日本の紅葉の美しさは世界に類がないといわれる。秋の紅葉が見られる世界の温帯北部のどの国よりも、日本にはさまざまな落葉広葉樹がある。しかも色が多様だ。

色づく木々の中でもっとも美しく紅葉するのはカエデ類だろう。カエデはモミジともいうが、モミジとカエデは別の語源をもつ。モミジは赤と黄の色をもみだす「もみずる」という動詞が名刺化し、転じて、とくに美しい色になるカエデ類をモミジというようになったといわれる。カエデはこの仲間の葉の形、つまりカエルの手のような形「カエルデ」からきたものだ。

植物学的にはカエデとモミジは区別していない。園芸界では葉が深く切り込む木をモミジ、切り込みが浅いとカエデとする場合もある。